火花 30号 8.14.
共産主義者同盟 関西地方委員会

ASPAC斗争の総括

(一) 一〇・八から佐世保にいたる実力斗争は六〇年以降の日本帝国主義の経済基盤の拡大強化に伴う社会的再編の進行に、六〇年安保共斗型の市民的統一戦線の基盤が破壊され、社・共・総評指ド部を頂点とするプロレタリアートの政治斗争が無限の後退を強いられる状況を打破り、反戦斗争の大衆的高揚を生みだした。そして反戦青年委員会という従来の組合主義的政治斗争の枠を越えたプロレタリアートの組織形態を生みだしこの組織化の中で革命的左翼は労働運動に公然と登場したのである。

羽田・佐世保斗争の高揚を支えた政治的条件はベトナム解放戦線を突出点とする後進国階級斗争の前進とこれを制圧出来ない米帝国主義の後退と日帝のアジアへの経済的・政治的侵略である。

プロレタリアートのベトナム人民の不屈の斗いへの自然発生的な連帯感と日帝のベトナム侵略加担を通じてのアジア侵略の政治的布石に対する抵抗を反戦・反政府斗争に組織したのは全学連、反戦青年委の実力斗争であった。六〇年以降、急速に進行した労働組合の体制内化、治安攻勢、街頭デモの暴力的規制に対して実力斗争はこれをマヒさせ、バクロすることによって、組合官僚の統制の枠をはづれることによって斗争のエネルギーは組織され、既制組織をも吸引したのである。

(二) 全学連の実力斗争部隊が切開いたこの高揚は革命的左翼の主体的力量ともあいまってその政治方針のもとに組織的に結集されたものではなかった。しかし帝国主義の世界的再編と危機を背景にしたこの斗争の高揚は七〇年安保を目前に控え、七〇年代階級斗争を通じての日本革命の戦略的展望をもった斗争方針を現在的に向うものであった。三派全学連の分解をもたらした四月以降の革命的左翼内部の党派斗争はこれをめぐって進展しているのである。

(三) 同盟七回大会は米帝の後退と日・独の進出という史上オ三度目の市場分割戦に直面した日本帝国主義の侵略と反革命に対決する力量を形成することが日本労働者階級の火急の任務であることを明らかにした。四月の沖縄斗争における中核派の「沖縄の本土復帰」のスローガン、「日米運命共同体論」は明らかに従属論的偏向である。これにもとずく基地斗争中心の斗争方針は自然発生的な反米斗争に拝跪するものであり、日帝の侵略と反革命に対決する包括性をもつ方針ではなく、日帝と対決する政治的質を形成するものではない。

我々が四月防衛庁斗争として提起した中央权力斗争は当初、戦術論的弱点をもちつつもASPAC斗争にいたる過程で明らかにされたことは、日帝の総路線と対決する要となる斗争を全国斗争を背景にその力を中央权力に集中してキい、それによって日帝の侵略と反革命の企図を全国的にバクロすることである。それを通じて、日帝と対決する思想と運動をプロレタリアートの内に形成し、革命的危機における ソヴィエト、Ⅱプロレタリアートの武装を準備し、中央权力をマヒさせる力量を現在から蓄積するものである。

(四) ASPACは日米安保体制にひきつづく、本年上半期の日本外交の要であった。六〇年安保が日米の極東安保であるのに対し、七〇年安保はアジア・太平洋安保である。英・仏のアジアからの撤退によるSEATOの空洞化をうめるものは東南アジア反革命政权と日帝の結合が不可欠である。東南アジアにおける二大帝国主義は日米安保とASPACで結合される。ASPACに先立つインドネシア一億ドルの援助決定とインドネシアによる自衛隊演習地提供は、軍事侵略が日帝のスケジュールにのぼっていることを示すものである。三日向にわたるASPAC討議は三木外交の一定の効能にもかかわらず武装解放斗争におびやかされる東南アジアの現実は日帝のヘゲモニーを要請しており日帝はASPACの軍事的性格への移行をも合めて、そのヘゲモニーを共同声明と来年度の東京開催で確立しようとしている。

(以下次ページ)

(五) 我々は4月沖縄、5月安保協にひきつづき、6月のんで高揚に方向性を与え、全国基地斗争を集約する斗争としてASPACを中央権力斗争として斗った。全学連三〇〇、反戦一五〇の斗争規模の実体は宣伝斗争にとどまらざるをえなかった。4月以降の権力の治安攻勢は実力斗争のおさえこみに成功しつつあり、一党派の党派斗争では局面打開が困難である、又三派連合による相乗作用が起らないということが斗争規模を縮小させた要因であり、さらに主体的にはASPAC斗争に他党派を結集出来なかった政治路線の包括性、とりわけ反帝派との統一斗争に実現しえなかった組織活動の弱さ、党内の不団一を克服しなければならない。しかし、これはASPAC斗争だけで斗った意義を弱めるものではない。この斗争の意義を規定出来なかった中核派のなし崩し的路線修正、未曾有ASPAC斗争への取組声明、社青同解放派の外務省デニは、7・27ASPAC斗争の失敗性を充分に証明している。